

地方都市における祭礼の変容

－土浦八坂神社祇園祭における氏子の対応に着目して－

坂本優紀・石坂 愛・武智玖海人・周 安琪
岩井優祈・篠原弘樹・白 奕佳・松井圭介

本稿は、茨城県土浦市における土浦八坂神社祇園祭を事例に、社会構造の変容に対する都市祭礼の変化を明らかにした。土浦祇園祭は、江戸時代から続く祭礼であり、御神体を乗せた神輿を渡御する神事と、氏子らによる山車や獅子屋台の出し物を巡行する神賑行事が特徴である。特に神賑行事である出し物の巡行は、担い手となる氏子らの状況により、その形態を変化させてきた。土浦市は、茨城県における南側の中核として都市化が進んできたが、高度経済成長期以降、人口の流出や商業施設の撤退により都市機能は衰退した。それに伴い、土浦祇園祭に関しても、担い手不足や祭礼費用の工面など、人的、物的側面での問題が深刻化した。このような状況において、出し物の変更や、新たな参加者を担い手として招き入れるなどの対応がみられた。またこうした祭礼の変化は、都市という人口が流動していく場において、新たなつながりを形成することに役立っており、都市祭礼の機能として今後ますます重要になっていくと考えられる。

キーワード：都市祭礼、担い手、コミュニティ、都市化、社会構造

I はじめに

I-1 研究背景と目的

祭礼は絶えず変化しながら現代まで継承されている。本稿は、茨城県土浦市における土浦八坂神社祇園祭（以下、祇園祭）を事例に、社会構造の変容に対する都市祭礼の変化を明らかにするものである。

祭礼は柳田（1942）で使用され始めた言葉で、見物人、風流の存在、行事の大規模さの3点が特徴としてあげられる。また、祭りから祭礼への変化は、中世以降、特に都市部で起こり、豪華絢爛な形態へと変わっていったことも指摘されている。これらの祭礼は、閉鎖的なムラ社会の祭りとは対照的に、現代においても一定の規模を保っており、「都市祭礼」として社会学や民俗学の分野で多くの研究が蓄積されてきた。祭礼を通して形成される都市住民の新たなコミュニティとして

「祭縁」を扱った樋口（2014）や、町内という民俗的区画の再生産を議論した前川（2008）など、それらの分野における研究では、地域のコミュニティに関するテーマが多いことが特徴としてあげられる。また、都市祭礼におけるヨソモノの役割を論じた金（2006）では、ヨソモノの属性により住民に受け入れられやすさが異なること、ヨソモノの存在が祭礼の維持や発展に影響を与えていることを明らかにした。祭礼を運営する担い手集団と対立・緊張構造で語られることが多かったヨソモノに焦点を当て、その積極的な役割を評価するとともに、担い手集団とヨソモノのインタラクションが都市祭礼を都市祭礼たらしめる要因として指摘している点で、金（2006）は新たな視点といえる。

一方、地理学における都市祭礼に関する研究は、例えば、近世城下町の祭礼形態の変容を扱った渡辺（1999）や、明治～昭和初期の博多における「山

笠」を保有する町の共同性の重層的構造とその変容を明らかにした遠城(1992)があげられる。また、現代的な祭礼を対象としたものでは、関東三大祭りにあげられる常陸総社宮例大祭の氏子組織を対象に、祭礼の空間構造を明らかにした新田(2000)や京都祇園祭の運営基盤を対象に、都市化に伴う人口変動への対応を考察した佐藤(2016)などがある。これらの研究では、都市祭礼の変容を都市の社会構造変化との関係で検討しており、祭礼の伝統と変化に対する担い手集団のダイナミックな対応が読み取れる。その一方で、研究対象とされてきた祭礼は、その規模が大きく、祭礼に関わる組織が多方面に及ぶ。また、祭礼には行政も加わっており、観光資源としての位置づけや、それに伴う経済面での援助などが、運営において影響を与えていることは明らかである。都市祭礼が資本主義文化のイデオロギー装置として機能するにつれ、「する」祭礼は、「見せる」祭礼へと変化し、演出の対象へと変わっていく(有末, 2000)。担い手としての住民の目線で祭礼を検討することで、生活レベルでの社会構造の変化を捉えられると考える。

本稿では、大規模に観光化され、行政が関わっている都市祭礼ではなく、住民主体による住民のための都市祭礼に着目する。高度経済成長期以降、多くの地方都市で劇的な変動が起こっており、都市人口の流出や中心商業施設の撤退は、都市機能の低下を引き起こした。そのような地方都市における住民らの能動的な変化を、都市祭礼を手がかりにしながら明らかにすることは、地域の変容を住民視点で考察するうえで重要である。さらに、人口減少へと転じた日本において、今後の地方都市における住民コミュニティを考える際の一つの視座を提供できるものとする。

本稿で事例としてとりあげる土浦祇園祭は、土浦駅周辺の19の氏子町を中心に祭事を運営している。土浦祇園祭では、各町が山車屋台や獅子屋台を氏子町内に巡行するとともに、ご神体を乗せた神輿が任意団体によって担がれる。土浦駅を中心とする市街地が氏子町であるため、その規模や周

辺への影響は大きいものの、現状行政の補助等は受けておらず、住民らを中心とする運営基盤ができて祭礼といえ、研究対象として適当である。

本稿の構成は以下の通りである。Ⅰ-2とⅡにおいて、対象地である土浦市と土浦祇園祭を概観する。次いで、Ⅲで土浦祇園祭の一つの運営主体である19の氏子町の現状を、その特徴をもとに四つに分類しながら記述する。Ⅳでは、氏子町を取り巻く任意団体の概要を、氏子町との関わりを中心に概観する。それらを踏まえⅤでは、都市の変容における住民らの土浦祇園祭への対応を議論する。

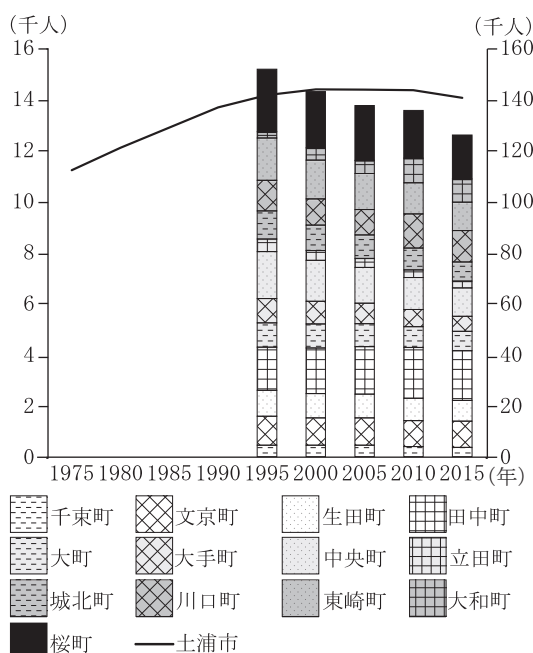
Ⅰ-2 八坂神社氏子地域の概要

土浦市は1875年に県庁第一支庁(現県南県民センター)と地方裁判所支部が設置されたことにより、茨城県発足以降、県南部における行政機能の中核都市の役割を担った。また、1896年の常磐線開通、1918年の筑波鉄道開通により、東京都と茨城県の結節点および県南部地域を繋ぐ交通の要衝となった(土浦市編さん委員会, 1975)。

1951年の小網屋開店を皮切りに、西武ストア(のちの西友)、京成百貨店、丸井といった大規模小売店が川口町を中心とした土浦駅前に進出したことで、経済的側面も充実化した。しかし、1997年に大手GMSのイトーヨーカドーを主要テナントとした駅直結型ビル「ウララ」が誕生したことで大規模小売店の撤退が相次ぎ、1990年代末期には小網屋と西友が、2004年には丸井が撤退した。さらに2005年のつくばエクスプレス開通は、つくば市の商業・居住機能を発展させ、土浦市の東京都と県南部を繋ぐ玄関口としての機能を弱体化させた。また、2009年に郊外型ショッピングセンターのイオン土浦ショッピングセンター(現イオンモール土浦)が開業したことや、これまで土浦駅周辺の商業機能の中核であったイトーヨーカドーが2013年に撤退したことも、土浦駅周辺の商業機能の衰退に拍車をかけた。このような要因から、高度経済成長期以降増加傾向にあった土浦市の人口は1990年代中葉から2000年代にかけて停滞し、

2010年以降減少傾向をみせる（第1図）。

八坂神社の氏子地域は、土浦港に流入する新川と桜川に囲まれたJR常磐線から西方約2kmの範囲と、土浦駅北東部に位置する川口町の一部を含む19の氏子町から成り立つ（第2図、第3図）。氏子地域はさらに4班に分類され、西部に位置する生田町、千束町、文京町、田中一～三丁目（以下、田中町）で構成される班（以下、A班）、北部から中央部に位置する大町、大手町、中央一～二丁目（以下、中央町）、立田町で構成される班（以下、B班）、北部から東部に位置する城北町、川口町¹⁾、東崎町、大和町で構成される班（以下、C班）、南部に位置する桜町一～四丁目（以下、桜町）で構成される班（以下、D班）に分かれる。これらの班は当番町と呼ばれ、毎年各班交替で土浦祇園祭の運営が行われる。当番町の役割や土浦祇園祭における運営形



第1図 土浦市と八坂神社氏子町の人口推移（1975～2015）

注1）1990年以前の町丁目別人口はデータなし。

注2）「田中町」は田中町1～3丁目、「中央町」は中央1～2丁目、「川口町」は川口1～2丁目、「桜町」は桜町1～4丁目を指す。

（国勢調査により作成）

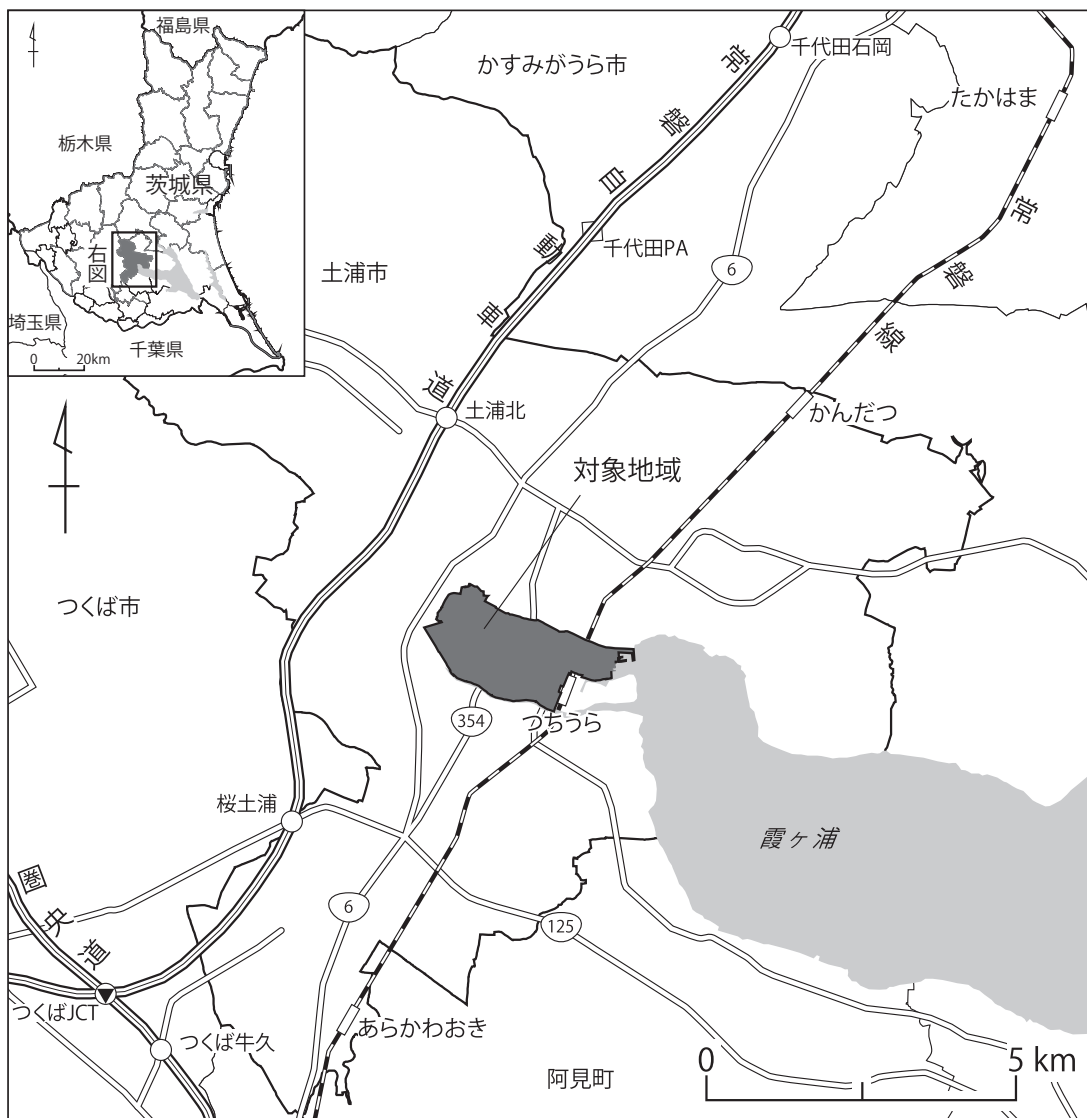
態などについてはⅡ－2で詳述する。

土浦市の人口推移と比較すると、市中心部に位置する氏子地域の減少傾向はより顕著である（第1図）。氏子町における年齢別人口構成（第4図）と土地利用調査の結果をあわせて、各班の特徴をまとめる。

土浦駅から最も離れた氏子地域西部に位置するA班の年齢別人口構成は、生田町と千束町の約40%、文京町の約50%が老年人口と高齢化率が高い。一方で、田中町は2017年現在も宅地開発が進行中であり、年少・生産年齢人口（以下、若年人口）が約75%と氏子町全体でも比較的高い地区である。班内の土地利用は田中二～三丁目の西部に農地が残るものの、立地する建物の過半数は戸建て住宅であり、新旧住民の混在した住宅地としての性格がうかがえる。

B班の中央町は中小規模のアパートやマンションなどの共同住宅を含む住宅地のなかに銀行や病院などサービス業関連施設が介在し、大規模な公園や裁判所など公共施設も包括しており、居住・商業機能をあわせもち、行政サービスの行き届いた地区である。中央町から南部に位置する大手町は、県道24号線沿いに小売店が立地するものの、中央町の住宅地の延長とした性格をもつ。県道24号線以南はさらに戸建て住宅の割合が高くなる。中央町と大手町は人口の過半数が老年人口であるほか、立田町については全人口269人と氏子地域中最少であり、若年人口は商業地域としての性格を持つ桜町二丁目に次いで少ない。班内において若年人口割合が最も高い大町でも老年人口の割合は約40%を占め、班全体での少子高齢化が顕著である。

C班は、商業施設が多く立地する地域である。川口町は大規模なショッピングモールを中心に小売店が立地するものの、約半数が空き店舗化している。川口町の北部ないし東部には大規模なマンションやアパートのほか戸建て住宅が立地し、その中に病院や介護施設といった医療・福祉施設が介在しており、さらに北部に立地する城北町と東崎町は住宅地としての性格が強まる。大和町は大



第2図 調査対象地域図

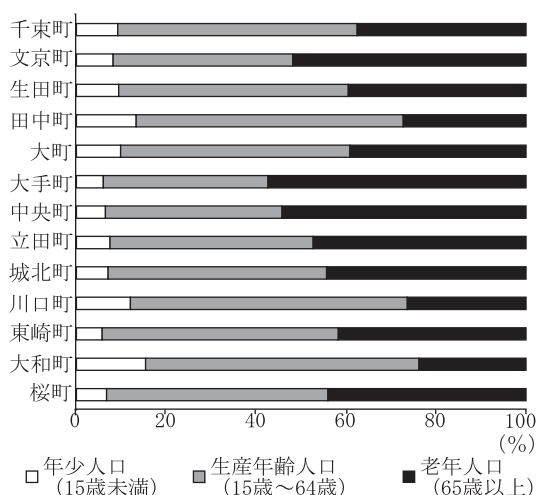
規模な分譲マンションを包括し、2010年以降も唯一人口増加がみられる地区である。マンション周辺には銀行や宿泊施設などのサービス業者が大規模な土地を所有し事業を展開するほか販売小売業者も10軒以上立地し、商業機能の高さもうかがえる。駅との近接性の高さや居住地における共同住宅の占める割合の高さ、商業機能の高さと影響しあい、川口町と大和町を中心とした若年人口の高

さと新住民移入率の高さがうかがえる。

桜町一～四丁目で構成されるD班は、飲食店を中心としたサービス業施設の占める割合が高く、桜町一～二丁目を中心に土地が細分化されており、桜町二～三丁目以西は居住地の割合が上昇する。一方で、桜町全体の人口は2,067人と全班中最少であり、若年人口数も最少である。



第3図 八坂神社氏子町



第4図 八坂神社氏子町の年齢別人口構成 (2015)

注1) 年齢不詳は除く。

注2) 「田中町」は田中町1～3丁目、「中央町」は中央1～2丁目、「川口町」は川口1～2丁目、「桜町」は桜町1～4丁目を指す。

(国勢調査により作成)

Ⅱ 土浦祇園祭の概要

Ⅱ-1 土浦祇園祭の歴史

土浦祇園祭は、土浦市真鍋にある八坂神社の祭礼である。本節では、江戸時代から行われてきた土浦祇園祭について、『土浦市史』をもとに概観する。

八坂神社は、牛頭天王(素戔鳴尊)を祀り、疫病などから守る除疫の霊神として信仰されてきた。江戸時代には、土浦城の鬼門除けとして藩主の崇敬を受け、土浦城鎮護の神としても信仰の対象となった。

土浦祇園祭の始まりに関しては、資料が残っていないため詳細なことはわからないが、江戸の天下祭りを真似たものであるといわれている。豊田(2001)によれば、関東近県では、山車の形式など江戸の天下祭りを強く意識した祭礼が多くあることが指摘されている。その中には、例えば関東三大祭りと呼ばれる、茨城県石岡市の「石岡の

お祭り」，千葉県香取市の「佐原の大祭」，埼玉県川越市の「川越祭」も含まれており，江戸時代には関東一円で山車を用いた城下町の祭礼として広がったと考えられている。

八坂神社の祭礼は，古くは6月12，13日の両日に実施されてきたが，毎年祭礼の他に「惣町大祭」と呼ばれるものがあり，1791年，1793年，1796年，1812年に大祭が行われた記録が残っている。1812年の「土浦御祭礼之図」では，6月10日から6月16日間までの7日間にわたって祭礼が行われ，中日の13日には祭礼の行列が土浦城内に入ったことが記録されている（第5図）。この図をみると，各町が行列をなしており，土浦の全町あげての祭礼であったことがわかる。この時の出し物は，町名を記した萬度²⁾を先頭に，飾りつけた萬度や屋台，朝鮮からの使者を模した朝鮮通信使や大名行列の仮装行列など，各町が趣向を凝らした行列であった（土浦市立博物館1993）。別の資料においても，神輿渡御では，氏子総代を先頭に，獅子や猿田彦，鉾旗持ち，神輿，山車というように，行列が盛大であったことが記されている。これらの行列は深夜にも及び，時には不埒な所業もあったため，1840年には藩から注意喚起がなされた。このような状況をみると，氏子町の住民にとって土浦祇園祭は，娯楽の要素を含み，各町内で連帯しながら祭礼を運営してきたと考えられる。

運営の形態に関しては，開始当初，氏子町は二つの班に分かれ，毎年一つの町内が出し物を巡行

してきたことが記録に残っている。その後，大きく祭礼の形態が変化するのが，第二次世界大戦が終結した翌年の1946年である。この年，それまで基本的には当番となった一つの町だけが巡行してきた形態から，二つの町が合同で出し物を巡行する連合当番制を導入した。この変化の理由として，大戦直後のため人的，物的ともに余裕がなかったこと，また，当番町にあたった三好町が，人口増加によって大和町から新しく分離した町であったため，大和町に手助けを依頼できる関係があったことがあげられる。そのため1946年は，当番町として三好町（現，桜町一丁目）と大和町が主体となり，戦中の土浦祇園祭自粛からの復活もあり，他の全町が山車や獅子屋台を巡行した。それ以後は，3～7町が当番町として祭礼を開催する形態となった。その後，1972年と74年に氏子町内の町名変更にもとない当番町の編成があり，現在の4当番の組み合わせになったのは1999年である。

現在の八坂神社の氏子町は，土浦駅近辺からその西側であり，八坂神社の境内と離れている。これは，明治の近代社格制度により八坂神社周辺の町が氏子町から外され，現在の氏子町外に境内が残ってしまったためである。そのため，祭礼時には氏子町内に御飯屋を建設し，祭礼の期間だけご神体を移動させる。

Ⅱ-2 現在の土浦祇園祭の状況

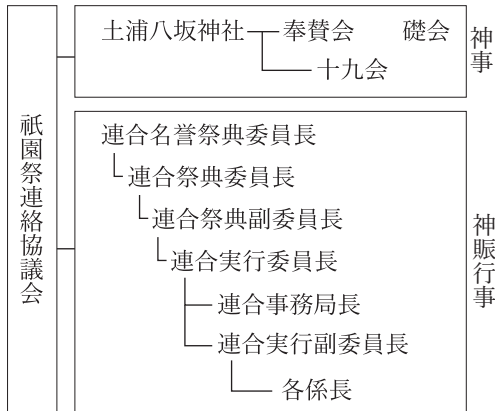
1) 土浦祇園祭の運営主体

3日間にわたって行われる土浦祇園祭は，神事と神賑行事の二つがそれぞれ異なる運営主体によって執り行われている。神事では八坂神社のご神体を乗せた大神輿が，神賑行事では各当番町の山車や獅子屋台が，それぞれ氏子町内を巡行する。

神事の運営は，宮司を中心とする八坂神社関係者の他，奉賛会や十九会（とくのかい），礎会（いしづえかい）といった団体が担っている（第6図）。八坂神社は，氏子町内に位置する旧村社の鷲神社および八幡神社を統括している。土浦祇園祭に参加する氏子町は，鷲神社の氏子範囲内であれば大鷲会，八幡神社であれば八幡会のいずれかに属し，



第5図 土浦御祭礼之図
（『にぎわいの時間』より転載）



第6図 土浦祇園祭の運営主体関係
(奉賛会資料と聞き取り調査より作成)

各神社や八坂神社の神事に参加する。奉賛会は、23の氏子町³⁾の各地区長が役員となり、氏子の代表として神事の運営に携わる⁴⁾。十九会は祭礼1日目と3日目に八坂神社と氏子町間の神輿出御・還御を行い、礎会は祭礼2日目に氏子町内で神輿の渡御を行っている。

一方の神賑行事は、連合制度に基づいて結成される連合実行委員会が中心となって運営される(第6図)。当番町制度とは、19の氏子町を4～6町ごとに分けて四つの連合組織をつくり、各連合が1年ごとに当番町となって山車・獅子屋台の巡行を行う制度である。さらに、各当番町内でも輪番制で毎回幹事町が選ばれ、連合実行委員会のなかでも中心的な役割を担う。つまり、4年に一度出し物を曳く年があり、約20年に一度は同じ連合組織をまとめる大役を担うことになる。そのため幹事当番になった地区では、地区長が神賑行事の長である連合祭典委員長を務め、実質的に神賑行事を取りまとめる連合実行委員長には幹事町の青年会長等が選ばれる。加えて、連合事務局長および会計長、交通長、渉外長、伝令長も幹事町からそれぞれ選出される。幹事町以外の当番町からは、各委員長や係長の補佐として人員が割り振られ、連合名誉祭典委員長は土浦市長を務める。また、当番町となった各氏子町は、青年会や育成会などを中心にそれぞれ実行委員会を組織し、山車・獅

子屋台の巡行に携わる交通係や進行係、参加者に食事を提供する給与係、沿道の住民から巡行中に「ハナ」と呼ばれる祝儀を受け取る係、会計係などに分かれて運営を行う。

また、2010年より、神事と神賑行事に携わる諸組織を取りまとめる目的で祇園祭連絡協議会が設置され、祭礼全体の運営について議論する場として機能している。

2) 神賑行事の運営

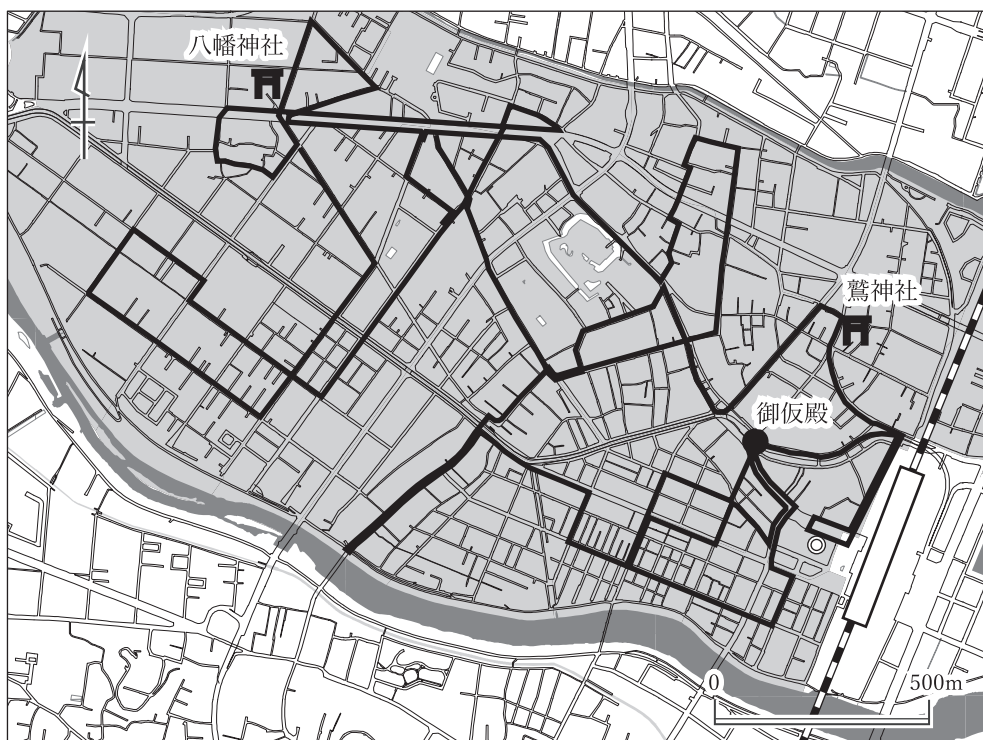
神賑行事においては、祭礼当日の山車・獅子屋台の巡行だけでなく、その前後に重要な関連行事がある。まず、祭礼の前週の日曜日に「ワタリツケ」と呼ばれる儀礼が行われる。これは、山車・獅子屋台および神事の大神輿が各氏子町内を通過するための許可を得るために実施される行事であり、当番町と礎会が各町の公民館に赴いて挨拶をする。ただし、当番町同士の挨拶は行われない。また、ワタリツケ当日あるいは祭礼の前日に、祭典事務所の開設と祭礼に先立った祝宴が行われる「事務所開き」がある。町内住民や囃子団体、地元企業等が参加することから、氏子町のなかにはその際に祭礼のための寄付を募るところもある。

祭礼前日の木曜日には、「笠揃え」と呼ばれる山車・獅子屋台を町内向けに披露する行事が行われる。祭礼当日は連合の山車・獅子屋台が氏子町内を巡るが、笠揃えでは各町の山車・獅子屋台がそれぞれの町内を巡行する。

祭礼当日は、連合の山車・獅子屋台が氏子町内を巡る。第7図は2016年の山車・獅子屋台の巡行経路を示しており、広範囲にわたって巡行していることが看取できる。巡行経路は毎年連合実行委員会によって決定され、年によっては当番町内とその周辺のみを巡行する場合もある。

祭礼終了後には、片付けおよび「笠抜き」が行われる。笠抜きは慰労会を指し、町内ごとに祭礼関係者が参加する。また、翌年の当番町への引継ぎも祭礼終了後すぐに実施される。

以上が当番町の神賑行事の運営についての概況であるが、当番町以外の年でも、祭礼当日に自町



第7図 山車と獅子屋台のルート（2016年）

注）1日目と3日目を図示した。

内で山車や獅子屋台、子ども神輿の巡行をする町が多くみられる。その目的のひとつとして、当番町の年に向けて寄付や祝儀を集めるという点があるが、この背景には当番町の運営と強く関係する財政的事情がある。当番町の年における祭礼にかかる費用は、各町平均して300～400万円前後であり、その資金の収集方法としては住民や企業からの寄付や、山車・獅子屋台巡行中に渡される「ハナ」、町内会費からの積立などがあげられる。すなわち、当番町の運営には当番町以外の年の活動も重要であるといえる。

3) 神事の運営

土浦祇園祭の神事として行われる神輿渡御は、祭礼の1日目と3日目で19の氏子町すべてを通行するように経路が決定されている（第8図）。

祭礼1日目は、八坂神社に祀られている御神体を神輿に奉斎し、氏子町内に移動させる神輿出御

が行われる。神輿を氏子地区まで担ぐのは十九会であり、例年約30名が参加する（写真1）。

神社を出た神輿は南下し、新川橋を渡って氏子町内に入る。氏子地区の各町内では、ムカエとオクリ、辻祈禱と呼ばれる儀式が行われる。神輿が町内に入る際にその町の実行委員会の役員等が町境まで出向いて迎え入れることをムカエといい、そのまま神輿に随行して町内を歩いた後、町外に出るのを見送るのがオクリである。また、神輿が各町境や祭典事務所、区長宅前などを通過する際には、官司が祝詞を上げる辻祈禱が行われる。

1日目の巡行経路を一通り回った神輿は、氏子町内に設置された御仮屋に収められる。現在はスペースの問題などにより、川口町内にある土浦高架道下の広場に御仮屋が設けられている。

2日目は本祇園といわれており、十九会に代わって礎会が神輿渡御を行う。市民団体である礎会には約500名の会員があり、大和町内の市役所



第8図 神輿のルート（2016年）

注）2日目の礎会による神輿移動は示していない。

周辺をはじめ氏子町内を巡行する。また本祇園では、御仮屋の前で神輿と当番町の山車・獅子屋台の共演が行われる。礎会は、この本祇園の共演においても神輿の担ぎ出しおよび御仮屋への宮入を

担当する。そして、2日目の最後に巫女による浦安の舞が御仮屋で執り行われ、本祇園は終了する。

祭礼最終日は、再び十九会が神輿を担ぎ、八坂神社への御神体の還御を行う。初日の巡行経路か



写真1 神輿渡御

写真右下の白装束を来て神輿を曳くのが十九会の会員であり、神輿の周りで帽子と羽織を着ているのが奉賛会の会員である。

(2016年7月 武智撮影)

ら外れていた氏子町を回り、ムカエとオクリ、辻祈禱を各町で実施した後、出御の際と同様に新川を渡し、八坂神社へ戻る。

Ⅲ 神賑行事の運営主体

Ⅲでは、土浦市における19の氏子町について概説する。本稿では19の氏子町を、土浦祇園祭時の外部団体への依存度から四つに分類する(第1表)。まず、住民の土浦祇園祭への参画が弱く、氏子町外の人員を導入しないと祭礼運営の維持が難しい「町外依存型」、次に、昔ながらの形式を維持し、すべての氏子町の中でも特に祭礼費用が高い町などが該当する「伝統継承型」、住民の土浦祇園祭への積極的な参画が見られる「住民主導型」、最後に、該当するすべての氏子町が少人数の引手で催行可能であることから獅子屋台を出し、お囃子は子どもが担当することで育成会を主体とした紐帯の形成に寄与している「時代対応型」である。ただし、千束町と田中三丁目、土浦祇園祭当日に出し物を曳かないため「その他」とする。

Ⅲ-1 氏子町の類型

1) 町外依存型

(1) 川口町

町内にファミリー向けマンションが建っているため、子どもの数が増えているが、人口動態としては転入より転出が上回っている。

土浦祇園祭には人形を載せた山車で参加している。以前は獅子屋台のみ所有していたが、15年前に山車を購入して以来、土浦祇園祭では山車を用いるようになった。提灯など小道具に対して少しずつ修復を行っている。

祭礼の運営は育成会が中心を担っている。曳き手は育成会を中心とし、町内の子どもおよび町外の知り合いなどへの呼びかけで集めている。参加するのは小中学生約80人で、青壮年約100人と60歳以上の役員約15人である。また、10を超える外部の団体に依頼しており、130人程度の参加がある。団体は各自の半纏を着用する。囃子は主に外部の団体に依頼しており、10~20人の参加がある。祭礼費用はハナ代と積立により賄っている。以前は特別寄付も募っていたが、現在は行っていない。

(2) 田中町二丁目

田中町二丁目は人口増加に伴い1974年に田中町から分離した町である。現在は、世帯が少ないものの、子どもの数が多いのが特徴である。土浦祇園祭にはかつて獅子屋台で参加していたが、1985年頃から山車に変更した。2008年には大幅改修を行い、煌びやかに増築された。

祭礼の運営は青年会が中心を担っている。曳き手には外部から6団体が参加しており、参加条件は特に設けていない。それに加え、町内の子どもも多く参加がみられる。囃子は新川囃子系である。また、近年は子どもを中心に囃子の練習が行われ始めている。祭礼費用は特別寄付によって集金しているが、来年から積立方式に変更する案がでている。

(3) 桜町三丁目

桜町三丁目における祭礼の運営は、以前は子ど

もを中心に育成会が中心になっていたが、少子化のため現在は青年会が中心的役割をとっている。

土浦祇園祭には神武天皇の人形を乗せた山車で参加している。1953年に獅子屋台を山車に改造し、現在もそれを使用している。神武天皇の人形は1995年から積載されており、ファッション用のマネキンをベースに装飾品をつけたものとなっている。また、同年山車の車体改良も行われており、より祭らしくするために操作部がハンドルから梶棒に変更された。

曳き手には外部から4団体が参加しており、各団体の半纏にワッペンをつけることが参加条件となっている。囃子は大和囃子に依頼している。以前は隣接するつくば市から囃子の団体呼んでいたが、町内に大和囃子所属の住民がいたため変更された。祭礼礼費用は特別寄付と積立によって集金している。

2) 伝統継承型

(1) 大町

大町の人口動態は、企業の転勤にともない社宅に転入する世帯が多く、定住しない場合が多い。そのため子持ち世帯が少なく、少子高齢化が顕著である。

土浦祇園祭には人形を積載した山車で参加している。戦前は獅子屋台も所有していたが、千束町へ寄付した。現在使用している山車は2000年代に購入したものであり、それ以前に使用していた山車は土浦市並木町に譲り渡した。

祭礼の運営は青年会が中心を担っている。曳き手は外部から4団体が参加しており、いずれも土浦市を中心に活動している団体である。参加に関しては条件を設けておらず、団体各自の半纏を着用している。囃子は道神という大町の小中学生で構成された団体である。当番町の際は、道神の手伝いとして土浦市内の他団体も参加する。

祭礼費用は町内の予備費から積立である。予備費は、道祖神神社に奉納される賽銭、ハナ代などで構成される。

(2) 田中町一丁目

田中町一丁目も田中町二丁目と同様に1974年に田中町から分離した。現在の人口は増加傾向にあり、子どもが約50人と多いのが特徴である。町内には約30年前に建設されたマンションが1棟あり、順調に世代更新がなされているため、若年層の人口が増加している。

この町は、山車と獅子屋台を両方保有しており、当番町の年は山車を巡行している。獅子頭は1980年に業者が作成したもの、獅子屋台は現在50～60歳代の住民による手作りである。

祭礼の運営は育成会が中心を担っている。曳き手には外部から4団体が参加しており、囃子は新川囃子の幸友組に依頼している。かつては土浦市内の囃子団体に依頼していたが、そこからノウハウを学び新たに町内の囃子団体を結成した。集金方法は特別寄付によって集金していたが、2009年から積立方式を採用している。

(3) 桜町二丁目

桜町二丁目は北関東最大の色町であり、氏子町内でも独特な町である。町内の人口に関しては、性産業従事者が町内に住民票がないと働くことができないことから、人口統計と実在の居住者数が異なる。かつては事業所や商店が多く、店主による祭礼の参加が積極的であったため、盛大に行われていた。しかし現在は、事業所の減少により祭礼も年々縮小傾向にある。子どもは数名しかおらず、土浦祇園祭への参加はほぼみられない。

桜町二丁目は山車を所有しており、土浦祇園祭にはそれで参加している。山車の重量を軽くするために、材料を工夫している。また、安全に対する意識が強くなり、山車に乗る人は安全ベルトで落下を防止している。

祭礼の運営は桜桜会と呼ばれる青年会が中心である。曳き手には町民とその知人に加えて4団体が参加しており、各団体の半纏にワッペンをつけることが参加条件となっている。参加者の保険代は町が負担している。祭礼の間の飲食に関しては、飲食店で食事を提供することが特徴である。多く

第1表 氏

分類名称	町名	人口総数(人)	世帯数(世帯)	山車・獅子	他団体の参加
町外依存型	田中2	437	202	山車	有
	桜町 3	534	227	山車 *	有
	川口町	1343	665	山車 *	有
伝統継承型	大町	808	337	山車 *	有
	中央1	465	184	山車	有
	大手町	675	256	山車	有
	田中1	962	439	山車	有
	大和町	956	433	山車 *	有
	桜町 2	355	206	山車	有
住民主導型	城北町	851	357	獅子	有
	中央2	789	322	山車	有
	桜町 4	606	303	山車 *	有
時代対応型	桜町 1	374	151	獅子	有
	文京町	1013	394	獅子	有
	生田町	871	347	獅子	有
	立田町	293	141	獅子	無
	東崎町	1213	545	山車	有

*：人形積載車，－：不明

注) 曳手の人数は最も多い時に参加している人数であり，出し物の巡行に必要な数ではない。

の氏子町は，金銭的負担の軽減のため飲食店での食事から，ケータリングの利用や町内女性らによる手作りの食事提供へと変更しているが，桜町二丁目は，未だ外食の形態をとっている。外食は食事内容が比較的豪華であるため，多くの曳き手団体から参加の希望がくる。

囃子は，戦後直後までは町内の芸者に依頼して

いたが，現在は将門囃子を乗せている。将門囃子には，公民館を練習場として貸し出す代わりに，土浦祇園祭時には協力してもらうという相互協力的な関係を築いている。祭礼費用は特別寄付によって集金しており，集金金額を町内の辻に張り出すという古くからのしきたりを守っている。

子町一覧

囃子	集金方法	山車の購入時期	曳手団体数	曳手の人数(人)	中心組織
依頼	寄付	32年前	6	100	青年会
依頼	寄付・積立	30年前	5	300	青年会
依頼	積立	12年前	15	200	育成会
依頼	積立	36年前	4	180	青年会
依頼	寄付	20年前	1	200	青年会
依頼	寄付	38年前	3	150	青年会
依頼	寄付・積立	33年前	4	280	育成会
依頼	寄付	63年前	0	350	旧住民青年会
依頼	寄付	—	4	200	青年会
住民	寄付	26・27年前	2	400	—
住民	寄付	10年前	2	300	青年会
依頼	積立	—	4	80	青年会
住民	積立	31年前	4	100	育成会
住民	寄付	20年前	0	50	青年会
住民	寄付	37年前	4	60	育成会
住民	—	18年前	0	100	青年会
住民	寄付	7年前	4	100	青年会・育成会

(2010年国勢調査および聞き取り調査により作成)

(4) 大手町

大手町は小中学生の数が約60人である。氏子町で最初に建設されたマンションが存在するが、現在はその多くが空き部屋となっている。また、人口の流動が少ないため、年齢層が徐々に高くなっている。そのため古くからのメンバーを中心に祭礼を運営している。

土浦祇園祭には山車で参加しているが、人形は積載していない。山車は、1980年の幹事当番を機に作成し、それ以降車輪や提灯などを4年に一度修復している。

祭礼の運営は青年会が中心である。曳き手は町内の小中学生約40人と、外部団体の約40人である。外部団体は各団体の半纏を着用し、町のワッペン

をつけ参加している。囃子は将門囃子である。祭礼費用は、当番町の前年に特別寄付で募っている。

(5) 中央一丁目

中央一丁目町は、古くは江戸時代の水戸街道沿いにあり、商業の中心地として栄えた。現在も商業機能が残っているが、商店主や事業主の中には、町外の住民もいる。人口に関しては、子どもの人数が少なく高齢化が進行している。

土浦祇園祭には人形を積載しない山車で参加している。戦前から使用していた山車が老朽化したため、1994年に博物館へ寄贈し、1997年に新たな山車を新調した。

祭礼の運営は青年会が中心であり、曳き手は基本的には住民のみとしている。ただし、以前に山車の貸し借りがあった土浦市内の町から10人前後曳き手として参加している。青壮年を中心に土浦祇園祭に参加している。囃子は65年前から東京葛西囃子に依頼している。祭礼費用は、ハナ代、特別寄付、積立によって集金している。特別寄付には芳名帳⁵⁾を用いている。

(6) 大和町

大和町にはマンションがあり、銀行や商店などの企業も多いことから、住民の流動が激しい。

土浦祇園祭には人形を積載する山車で参加しており、現在の山車は1954年から使用している。また、獅子頭も有しており、それは大正期以前に購入したといわれている。1981年までは当番町の前年に、助当番⁶⁾として山車を巡行していたが、それ以降助当番での巡行は行っていない。

青年会が中心となり祭礼の運営を担っている。曳き手は、最高で350人が参加し、外部団体には依頼していない。曳き手は、小中学生20～30人と高校生から20歳代の若年層をメインに構成されている。若年層の参加を促すため、育成会を中心に、マンションに居住する新住民へも声かけをしている。町として曳き手用の半纏を500枚用意しており、参加者はその半纏の着用と前日までに申し出が必要である。囃子は、大和町の住民を中心に活

動している大和囃子に依頼している。祭礼費用はハナ代を中心とした寄付金である。

3) 住民主導型

(1) 城北町

土浦祇園祭には山車と獅子屋台で参加している。1989年からは後述するO氏所有の山車を借用している。獅子屋台は青年会を中心に住民らで作成した。子ども中心の祭礼となっており、獅子屋台は人数が少なくても曳くことができるため利点となっている。

祭礼の運営は、青年会と育成会が中心を担っている。曳き手は外部団体にも依頼をしている。曳き手用の貸し半纏やシャツを20着用意しており、それらを着用することが参加条件となっている。囃子は、以前は新川囃子に依頼していたが、2010年より子どもたちが担当することになった。祭礼の一か月前から週3回練習を行っており、当日屋台に上がられるのは6年生を中心に約15名である。祭礼費用は主に積立と前年の特別寄付で集金している。山車から獅子屋台に変更したことで曳き手の動員数が減り、人的・金銭的負担が軽減された。

(2) 中央二丁目

中央二丁目は、人口の流入よりも流出が多く、人口が減少している。またマンション世帯との交流が少ないため、育成会を中心に新たな繋がりを模索している町である。

土浦祇園祭には人形を積載しない山車で参加している。以前の山車は組み立て式だったが、現在は組み立てたままの状態で倉庫に保管している。中央二丁目だけが倉庫のシャッターを透明な板にしており、中身の山車が常時見られる形態である。

祭礼の運営は青年会を中心に行っている。曳き手は町内から約60名が参加しており、平均年齢50歳となっている。約20年前から二つの外部団体に依頼している。町では100人分の貸し半纏を保有し、外部団体の曳き手にも町の半纏を着用してもらっている。祭礼費用はハナ代、特別寄付、積立

によって集金している。また、個人からは物品提供も行われている。

4) 時代対応型

(1) 桜町四丁目

以前は商店主による積極的な参画により土浦祇園祭は活気に溢れていたが、現在は店舗の減少や高齢化などにより、縮小傾向にある。また、単身アパートが多いため、新しく流入してくる住民らの参加は少ない。

桜町四丁目は、山車と獅子屋台を両方保有しており、土浦祇園祭には当番町の年は山車、それ以外の年は子どもが囃子を担当することができる獅子屋台を町内で巡行している。

土浦祇園祭の運営は青年会が中心を担っている。曳き手には外部から6団体が参加しており、参加条件は特に設けていない。山車巡行時の囃子は、かつて新川囃子であったが、現在は町オリジナルの囃子を採用している。獅子屋台の巡行で演奏される子どもの囃子は、曳き手団体から教わったものである。また、当番町以外の年では、土浦祇園祭中の食事に、町内の女性らで結成する「母の会」がカレーを作るなど、味覚による住民らのコミュニケーションを図っている。

祭礼費用は特別寄付によって集金している。

(2) 生田町

生田町の人口は増加傾向にあり、新しいアパート住民による土浦祇園祭への参加がみられる。また、子どもが約70人と比較的多いのも特徴である。

土浦祇園祭には獅子屋台で参加している。大きさの異なる四つの獅子頭を所有しており、大人と子どもで使い分けられている。かつて、幹事当番の年に桜町二丁目から山車を借りたこともあったが、借用費がかかること、また山車は大きいため子どもの参加に制限がかかるという理由から、現在では幹事当番の年でも獅子屋台を出している。屋根の腐部や獅子頭の打撲跡などの修理は住民が行っている。

祭礼の運営は育成会が中心となっている。曳き

手のみ外部から4団体が参加しており、各団体の半纏にワッペンをつけることが参加条件となっている。囃子は田中町と大町から教えてもらったものを子どもが演奏している。土浦祇園祭の約2週間前から町内の高校生による指導のもと、小学生が練習し、当日は屋台の上で演奏する。本番前の総練習では、騒音対策のため町内の小売店の駐車場を借りて行っている。祭礼費用は特別寄付によって集金している。

(3) 桜町一丁目

桜町一丁目は人口が減っており、特に町内の小中学生が15人と子どもの数が少ない。人口減少と高齢化のため、町内に担い手となれる人が少ない。

土浦祇園祭には獅子屋台で参加している。これは1987年、住民らで制作したものである。ただし、幹事当番の年には、山車を城北町のO氏から借りている。

祭礼の運営は育成会が中心となっている。曳き手は町内住民以外に四つの外部団体に依頼しており、約30人が参加し、曳き手と囃子の演奏者として活躍している。曳き手としての参加条件は特に設けていない。囃子は子どもを主体とし、一部外部団体にも手助けをしてもらう。土浦祇園祭の1ヶ月前から週に1度のペースで練習を行う。祭礼費用はハナによる寄付と積立で賄っている。

(4) 東崎町

東崎町には大手企業の社員寮があるため人口は多いものの、住民の流動が激しく土浦祇園祭への参加者は少ない。

土浦祇園祭には獅子屋台で参加している。以前は、借りた屋台を使用していたが、約10年前に新たに購入した。

祭礼の運営は青年会と育成会が中心を担っている。曳き手は約90人であり、小中学生20人弱、青壮年層が約70人参加している。外部の4団体に依頼しており、約50人が参加する。住民らは東崎町の半纏を着用し、外部団体はそれぞれの半纏に、東崎町のワッペンをつけることになっている。囃

子は町内の子どもを中心に、他の町の子どもも受け入れて演奏している。これは、町の子どもが少なく、他の町の子どもとも交流をさせてあげたいという思いと、囃子のない他の町の子どもを楽しませたいという町内外の子どもの事情に合わせたためである。

祭礼費用は特別寄付で集金している。特別寄付の際には、芳名帳を使用している。

(5) 文京町

文京町は学校が近くにあるため、分譲マンションに子どものいる世帯が多く入居している。

土浦祇園祭には獅子屋台で参加している。この獅子屋台は、宝くじの助成金によって2016年に新調されたものである。

祭礼の運営は青年会が中心を担っている。曳き手には外部からの団体を受け入れていないが、立田町と土浦祇園祭時に人員の貸し借りで協力関係にある。文京町と立田町は同一の連合当番ではないため、文京町が当番町の年には立田町から、逆に、立田町が当番町の年は文京町から約10人が助人として参加する。こうした人員の交換は約8年前から行われている。囃子は子どもが担当し、土浦祇園祭の約2週間前から練習をする。

祭礼費用は特別寄付と積立によって賄っている。

(6) 立田町

立田町の人口は少なく、青年会員も少ない。アパートやマンションは賃貸のみであるため、新住民が転入しても定着することがない。このような新住民は町内会への加入は少ないが、子どもがいる世帯の場合は、育成会の関係で町内会に入ることが多い。

土浦祇園祭には獅子屋台で参加している。1990年代初頭に獅子屋台を購入して以来、屋台の装飾の手直しは頻繁に行っている。

祭礼の運営は青年会が中心を担っている。曳き手は町内住民および住民の知り合いと、文京町の住民である。町内の住民が少ないため、曳き手の

半数は他の町の住民である。囃子は立田町独自の囃子保存会がやっている。囃子保存会は小中学生と青年会員を中心に約30人で構成されており、土浦祇園祭開催1カ月前から練習をする。

祭礼費用は積立により集金している。特別寄付も募るが、集金は少額である。

5) その他

(1) 千束町

千束町の人口は減少傾向にあり、子どもの数も減っている。アパートの住民は単身が多いため、町内の行事への参加は少ない。また、かつては比較的規模の大きい企業が立地していたが、近年撤退したため町内に空き地が多い。

土浦祇園祭には獅子屋台で参加していたが、2015年にハンドル部が壊れてしまい、以降参加していない。この獅子屋台は桜町三丁目から譲り受けた土台に改築を加えたものであった。当番町であった2004年には、市内の他の町から山車を借りて参加したり、2011年にも山車を借用して参加した。

祭礼の運営は育成会が中心を担い、2015年までは外部から5つの曳き手団体が参加していた。囃子は桜町三丁目から教えてもらったものであったが、現在は新川囃子である。土浦祇園祭の3か月前になると小学生が週1回集まり、囃子の練習をする。

(2) 田中三丁目

田中町三丁目は市街化調整区域であり、新世帯やマンションが多く、人口が増加傾向にある。若年層や青壮年層が多いが、町内組織の青年会や老人会などはまだ発足していない。

山車および獅子屋台を所有していないため、土浦祇園祭には参加していない。しかし、町民には子どもが通う学校の父母同市のつながりによって、他地区の祭礼に曳き手として参加している者もいる。かつては空き地にテントを設営し、そこで町内の決め事を行っていたが、5年前に公民館が建設され、町民が集まる場所ができた。これに

より、祭礼に限らず町内のイベントを進めることが可能になった。

当番町以外の年は育成会が中心となって、小学生による樽神輿が行われている。彼らは町内の半纏を着用して参加している。囃子はカセットテープで流している。

Ⅲ－２ 氏子町の総括

Ⅲ－１から、土浦市のそれぞれの氏子町には人口や出し物の種類、曳き手団体の導入などの社会背景に応じて様々な形態があることがわかる。

出し物の種類では、山車を保有する町が11、獅子屋台を所有する町が6である。集金方法では、特別寄付による町が9、積み立てによる町が5、その両方が2町であった。中心となる組織でみると、青年会中心の町が12、育成会中心の町が7である。囃子では、外部に依頼する町が11、住民が担う町が8である。この囃子に関して、山車に乗せる囃子には楽器演奏者だけでなく舞いを披露する者も必要となるため、基本的に山車では囃子を依頼する必要がある（写真2）。一方、獅子屋台に乗せる囃子は舞を踊る必要がないため、住民で担当することが可能となることから、育成会が主体となって子どもが参加できるようにしている場合が多い。

Ⅳ 土浦祇園祭における主要な参加団体

Ⅳ－１ 奉賛会・氏子町以外の主要参加団体の概要

１）曳き手団体と囃子団体

（１）つちうら祭会雅連合

つちうら祭会雅連合（以下、雅連合）は、土浦市在住者を中心に結成された曳き手団体を統括する連合組織である。雅連合には市内36町において組織された13の曳き手団体の会長らが所属しており、全団体の会員数は2017年時点で858人にのぼる。土浦祇園祭では当番町にあたる氏子町以外から山車を出すことが困難であるが、祭事において個人所有する市民山車の出向を望む市民や、山車



写真2 三層式山車

中段に囃子と舞手を乗せ、上段に人形を載せる。

（2016年7月 武智撮影）

の曳き手として参加を希望する氏子町外在住の市民が多数いた。このような団体の活動を統制することで曳き手団体による祭事への参加を可能とすることを目的に、市内で活動する曳き手団体幹部らによって結成された。

結成当初の1995年は阪神淡路大震災による復興支援のための募金活動に尽力した。この功労が評価されたことで1996年開催のキララ祭りにおいて市民山車の巡行を皮切りに、2000年以降は雅連合を介し、各団体が土浦祇園祭においても山車の曳き手の援助団体として参加することが可能となった。雅連合の活動はキララ祭りにおける市民山車巡行のみならず、2000年以降は模擬店の出店や子どもへの風船配布などのボランティア活動のほか、キララ祭りおよび土浦祇園祭開催時には市内清掃活動を実施し、活動を多角化している。

（2）土浦祭囃子会

土浦祭囃子会（以下、祭囃子会）は、土浦市内

の囃子団体を統括し、囃子団体へ活動の場を提供するため、2011年に発足した団体である。2016年時点で市内19団体から21人の会員が所属し、市内の囃子団体を統括しており、2013年以降は土浦祇園祭連絡評議員会にも出席している。1990年代以降の市内の商業機能の低下や少子高齢化にともない、土浦祇園祭の活動力が低下することを懸念した八坂神社宮司の助言により、桜町在住のA氏によって設立された。

A氏は1977年から現在まで囃子団体を運営しており、土浦祇園祭においては川口町と大手町が当番町の際に出張している。しかし、神賑行事の企画運営が当番町に限られるため、他の当番町の年に活動できる機会が少ないことに不満を抱いていた。そこで、祭囃子会では土浦祇園祭開催期間中に駅前には舞台を設置し、巡行や奉納などの祭礼の枠組みとして出演していない囃子団体が演舞する場を設け、土浦祇園祭以外にも真鍋鹿島神社祭礼や土浦文化祭など、市内で開催される祭事において同様の場を設置することで、市内の囃子団体の維持存続に貢献している。囃子の演舞場を設置する以外に、土浦駅周辺に立地する小売店を包括する商店会と協力し土浦祇園祭開催中に提灯を装飾するなど、景観的な華やかさを演出する活動に取り組んでいる。あわせて市民および市外からの観光者による土浦祇園祭への参加しやすさを意識しており、土浦祇園祭開催日の週末固定化もA氏によって提案されたものである。

(3) 新川囃子新城組

新川囃子新城組（以下、新城組）は、1977年、城北町在住のO氏によって結成された囃子団体であり、現会長は祭囃子会の副会長を務める。城北町と真鍋町に在住する15人で結成された新城組は、2016年には52人の会員を束ね、4歳～82歳の幅広い年代が参加している。O氏は祭囃子のほかにも山車の製作も行っており、多様な側面から祭事に関与する。新城組については、祭事を通して市民の紐帯を強化したいという思いから結成に至った。そのため、在住する町区を超えた参加者

を募集しており、結成当初は城北町と一部の真鍋町の住民のみで構成されていたものの、現在は参加者の約8割が城北町外在住者である。なお2010年以降は親子での参加者が増加し、現在会員の約2割を年少者が占める。

新川囃子は氏子町外を含む市内と牛久市において、新城組を含めた6団体が連合として活動している。各団体の所属する地域で開催される祭事に参加しており、人員不足の際には連合間で適宜援助者を出す。土浦祇園祭においては、城北町を含む班が当番町の際には新城組が囃子を演奏し、田中町を含む班と大町を含む班がそれぞれ当番町の際には連合から姉妹団体が参加している。新城組が主体となって参加する祭事はキララ祭り、土浦一中公民館祭り、堺市のさかいふるさと祭り、かすみがうらランナーズビレッジなどである。一方で、2016年に開催された土浦文化祭や元旦に行われる土浦駅ビルでの公演などは氏子町内の祭事にも関わらず、氏子町外で活動する姉妹団体が主体で参加した。これは、祭囃子会の設立にともない市内での活動の場が拡大したことで、連合制度連携を介した市内や近隣市町村在住者とのコミュニティの維持に貢献するという新たな活動理念に基づいた結果である。

(4) 里神楽翁会

里神楽翁会（以下、翁会）は、大和町在住のM氏によって2006年に設立され、現会長は祭囃子会の事務局長を務める。大和町在住の6人によって結成された翁会は、2017年現在、20代から50代を中心とした約20人で活動している。

翁会は前衛団体である大和囃子の芸風を引き継いでいる。1981年の大和囃子創設以前、大和町が土浦祇園祭当番町の際には東京都から囃子団体を招いていた。この事実を踏まえ、大和町を含む旧土浦町は歓楽街であったにも関わらず芸事を嗜む人が少なく、土浦祇園祭においても囃子屋台が不足していると感じたM氏は、大和町で生まれた大和囃子を広めたいという気持ちから発足に至った。翁会結成当初、M氏は大和町在住者で会員を構成

することを念頭においていたが、公演機会の多さと練習頻度の高さから曳き手団体などの間で知名度が広まり、熱心な囃子愛好家のほか、並木町や真鍋町など囃子をともなう祭事を行わない氏子町外からの参加希望者が増加した。そのため、現在は7割以上が市内他町在住の会員である。

土浦祇園祭では大和町が当番町の際に演舞するほか、2007年以降は初日に仮設舞台を設置し、奉納として囃子を披露している。2015年の活動は、土浦祇園祭を含む全13件が土浦市内の祭事への出演であり、土浦市内で活発に活動している。

2) 神輿の巡行に関する団体

(1) 十九会

十九会は八坂神社から御飯屋まで神輿の運搬について責任を担い、祭事の事前準備を任せられた団体である。2001年に結成され、2002年度の土浦祇園祭において第一回目の活動を開始した。十九会結成の要因は、第一に経済的要因があげられる。1999年以前、神輿の運搬は近隣市町村に在住する約40人の大学生を奉賛会がアルバイトとして雇用することで労働力を補填していた。しかし、被雇用者一人あたり1日1万円、計2日分支給していたため、被雇用者への総支給額は約100万円にのぼった。しかし、氏子町民の減少にともなう奉賛会の予算減少などの理由により人件費の見直しが迫られ、雇用制度の撤廃に至った。第二の結成要因として、神輿渡御・還御の真正性が見直しがあげられる。土浦祇園祭開催当初は氏子が神輿を運搬していたという史実があることを知った宮司は、この業務を神事として主張することを望み、氏子町民を中心とした市民による再構成を提案した。このような神事としての強調は参加者の服装からも見受けられ、十九会結成当初、曳き手は所属する各氏子町の法被を着用していたが、2000年代中葉から参加者全員が神職装束を着用することが義務付けられた。

2016年度の土浦祇園祭運営時においては17町⁷⁾から23人の役員が選出された。役員の選出は各氏子町町内会に委任されるが、情報共有の円滑化の

ため、青年会長や祇園祭実行委員長など、他団体としても土浦祇園祭に関与する者が選出される場合が多い。

神輿の運搬における曳き手は当番町以外の氏子町に属する十九会役員が各々の町区で呼びかけをして募る。曳き手は必ずしも役員の所属町区および市内在住者から選出されるものではなく、役員が選出した市民であれば参加できる。例外として市外居住者の参加も可能であるが全曳き手のうち3人以内にとどめており、あくまで土浦市民の祭事として位置づけ、市民中心の運営主体を構成している。また、役員が公募をかけることは禁止されており、あくまで役員の紹介という形式で曳き手が決定されることにこだわる。なお、重さ780kgの神輿を曳くという重労働であることと、懇親会では酒類が提供されることなどから、曳き手は青壮年層の男性を中心に構成される。祭事での活動は土浦祇園祭および八坂神社秋季大祭に限定され、八坂神社に関連する祭事への参加に徹している。

十九会結成後、曳き手への報酬は交通費のみ3,000円⁸⁾支給され、装束のクリーニングは参加者各自で負担するなど、神輿の運搬をボランティア化することで人件費の削減に成功した。

(2) 礎会

礎会は土浦祇園祭において2日目に執り行われる神輿巡行を企画・運営する団体である。1960年代に東京都の神田祭を中心に神輿製作が流行し、1970年代には茨城県にも町神輿で宮入をする様子がみられるようになる(宮本・岩間, 2011)。これを背景に八坂神社宮司は、中央町在住の青年会会員に神輿を担ぐよう要請し、1977年に氏子町内在住の青年会員15人によって結成された。礎会内部の実行委員会は青年会員を中心に80人で構成され、実行委員長は、青年会出身者が着任するものの市内出身の是非は問わず、市外出身者も青年会に参加しやすい状況をつくっている。

宮司は神輿の担ぎ手を可能な限り市民で構成するよう希望したため、青年会は担ぎ手として参加

するためには礎会の会員となることを要し、市内各町に28ある下部組織に登録する仕組みを作った。2017年現在の累計登録者数は約500人であるが、登録者のうち氏子町在住者は約3割～4割に留まり、約5～6割が市内氏子町外区在住者、約1割が市外からの登録者である。神輿の全巡行行程における担ぎ手の総数は約150人のため、担ぎ手は各組の登録者を管理する組頭によって登録者の中から選定される。礎会の一員として神輿を担ぐ際には礎会専用の半纏を着用する必要がある。他の半纏との二重羽織などを一切禁止している。装束を統一し、青年会員によって選出された者のみが神輿担ぎに参加することを主張している。また、礎会では土浦祇園祭のほかに2000年代中葉から「子ども神輿」とよばれる祭事を主催し、市内在住の小学生にレクリエーションの場を提供している。このような事例から、市民からの信頼の構築と市民を中心とした参加者の取り込みを意識しているといえる。

Ⅳ-2 主要参加団体活動形態の変化

Ⅳ-1の事例を整理し、各団体の結成経緯を踏まえ、運営および活動形態の変化を分析する（第2表）。

1970年代、県内では神輿渡御を組み込んだ祭事が流行し、神輿渡御の運営を一任された青年会員は礎会を設立し、土浦市や八坂神社の活性化に尽力する一方で、安全性を考慮した参加者の統制を重視した。神輿渡御にともなう神賑行事として、氏子町内では囃子団体も設立されるようになった。しかし、土浦祇園祭は当番町が運営主体となるため、当番町以外の囃子団体は演舞の機会にめぐまれないという課題があった。

また、これまで土浦祇園祭に参加していた各曳き手団体は、氏子町内で祭事における安全性の意識が高まり保守的な性格が強まったことで、曳き手としての参加が困難となっていた。このような団体が祭事に関わる場を創出するため、1996年に雅連合が設立された。雅会連合が各団体を統制し氏子町との窓口となることで、曳き手団体による

第2表 奉賛会・氏子町以外の祇園祭関連組織（2017）

活動の種類	団体名	結成年	理念	構成員の居住地		活動範囲	奉賛会との関係
				役員	参加者		
山車巡行	つちうら祭会 雅会連合	1995	O	○	○	○	なし
囃子	土浦祭囃子会	2011	K	◎	○	○	あり
	新川囃子	1977	C	○	外	外	なし
	新城組 里神楽 翁会	2006	K	◎	○	○	なし
神輿巡行	十九会	2001	R O	◎	○	◎	あり
	礎会	1977	CRK	○	外	◎	あり

構成員の居住地

◎：氏子町民のみ ○：土浦市民を含む

外：他市町村民を含む

理念

K：祭事・地域の活性化

C：地域コミュニティの強化

R：祭事運営の円滑化 O：その他

活動範囲

◎：祇園祭のみ ○：土浦市内のみ

外：土浦市外を含む

注1)「理念」は団体の結成経緯と現在の活動目的を指す。

注2)「活動範囲」は連合組織に所属する小団体の活動範囲を含まない。

（聞き取り調査および提供資料により作成）

土浦祇園祭への参加が可能となった。雅会連合はボランティア活動などや清掃活動を通し清廉性を市民に主張することで、土浦市内の祭事における曳き手団体の参加を継続させている。

2000年以降は、土浦市の商業機能の衰退や高齢化などの影響により、土浦祇園祭の神事および神賑行事の運営存続が課題となった。八坂神社宮司は十九会を設立し、神輿の運搬を神事として位置づけ直すことで、氏子町民の一任による市民を中心とした運搬形態の確立をはかるとともに、神輿運搬に関わる人件費の削減をはかった。一方で、土浦祇園祭盛期の景観を復元するために設立された祭囃子会は、土浦祇園祭のほかキララ祭りや土浦文化祭などの祭事において、市内で活動する囃子団体の活動の場を提供するようになる。

近年、八坂神社は神事関連団体による「市民の祭事」を徹底した規制は揺るがないものの、祭囃子会設立への後援など、囃子団体の活性化にも協力的である。神社が土浦祇園祭への関与を問わず

囃子団体の活動に目を向けることで、間接的に祭事の活性化に貢献している。一方、神賑団体は統制機能を持ち氏子との窓口化をはかることで、団体活動の維持と土浦祇園祭りににおける活動の存続に成功した。

V 社会構造変化に対する都市祭礼の対応

土浦祇園祭の催行は神事と神賑行事の双方が成立することで成り立ってきた。神事と神賑行事は祭礼の根幹を成す構成要素であり、安定的な運営のためには地域の様々な関係主体の連携・協力・調整が不可欠である。一方、土浦市の中心市街地に位置する氏子町の都市としての性格は、氏子町の社会構造の変化と密接に関係し、祭礼の運営形態にも影響を及ぼしている。Ⅲでは氏子町ごとの神賑行事の運営形態を基に社会構造変化への対応に着目し、氏子町の性格を4区分に分類した。各氏子町における地域の社会構造変化への対応の方法には差異があるものの、現在の土浦祇園祭は氏子町ごとに異なる対応の結果の総体と捉えられ、氏子町の対応を検討することで都市祭礼としての土浦祇園祭の特徴が明らかになる。そこでⅤでは、ⅢおよびⅣで述べた神賑行事と神事の運営主体の状況を踏まえ、土浦祇園祭の社会構造変化への対応を包括的に考察する。

V-1 土浦祇園祭における運営形態変化

土浦祇園祭における運営形態の変化は、山車や獅子屋台といった物的側面と曳き手人材といった人的側面においてみられる。まず物的側面については、山車から獅子屋台への転換が特筆される。転換が図られる背景には様々な要因があるが、その一つに構造上の特徴がある。山車は伝統的で迫力のある印象を与える一方、ハンドルで操作できるような舵やブレーキが備わっておらず、進行方向や速度のコントロールには技術を持った人材が不可欠である。さらに人形を昇降させるための仕組みなどが備わっており、獅子屋台と比較して山車の総重量も大きく、曳き手として十分な人材を

確保する必要がある。こうした特徴をもつ山車に対し獅子屋台は車輪としてゴムタイヤを使用したり、舵やブレーキを備えることで、山車よりも少ない曳き手でも曳き回すことが可能である。また使用歴の長い山車は修復箇所も多く、時に基礎部分の修繕も必要となるため修復費用がかさむ傾向にあるが、獅子屋台の修復は提灯といった装飾部分が主であるため、山車よりも修繕費用が低い傾向にある。

社会構造の変化に対する物的側面での対応がみられる一方、曳き手を外部に依存することで運営を持続させようとする人的側面での対応もみられる。特に、伝統的な形態の維持を志向しており、山車を出している町は獅子屋台を出している町よりも曳き手団体の参加数が多く、先述した山車の物的側面での問題を外部からの人材に頼ることで解決している。

町内での曳き手不足の問題解決にあたっては、曳き手の外部依存のみならず物的側面での対応とも密接に関連している。出し物として獅子屋台を用いている町がその好例である。既に述べたように山車から獅子屋台への転換により曳き手の少人数化が可能となることに加え、囃子方の属性にも影響している。山車に乗る囃子方は舞子と兼任であることが多く、十分な芸の技術が要求される。そのため、専門の外部団体に出演を依頼することが多く、町は出演料の負担が必要であった。一方、獅子屋台ではお囃子の演奏のみであるため、就学児を含む住民が担当することが可能となる。なかには町の住民がお囃子の任意団体に所属し、その団体の一員として町の囃子方を務める事例も見受けられる。高い技術力を有する外部団体への依頼から、住民主体の囃子方への変化は、現在の土浦祇園祭の「等身大の祭礼」としての性格を端的に表している。

就学児の参加については育成会を通じて就学児の参加を促進することで曳き手人数の確保がなされている。こうした町では祭りの性格が青年中心の祭りから子ども中心の祭りへと変化している。また、育成会の役割は祭りへの就学児の参加促進

のみならず、新住民の参加促進につながっている。氏子町の住宅地化が進むに従い集合住宅に入居する新住民も増加しているが、地域行事への理解や参加が進まないという問題が発生している。しかし就学児やその母親が中心となって構成されている育成会は新旧住民の相互交流が促される場であるため、育成会を通じて新住民が地域行事である土浦祇園祭に参加するという動きがみられる。新住民世帯に属する男性の多くは雇用労働に就いているため、地域コミュニティとのつながりが希薄になりがちだが、子どもや母親の育成会でのつながりを契機に祭りへ参加するという例も聞かれ、育成会の存在が土浦祇園祭の運営において重要な役割を果たしている。

社会構造の変容に運営形態を対応させる動きは、IVで述べたように神賑行事と同様、神事についてもみられる。礎会や十九の会による外部団体や外部人材の導入は土浦祇園祭の運営維持に不可欠となっており、八坂神社や氏子町は外部依存による祭事の維持と真正性や健全化の担保の両立を目指して、適切な外部人材を安定して導入できる仕組みを確立してきた。こうした取り組みは、十九の会の事例のように経済的な負担の軽減が達成されるばかりでなく、祭事の意義を地域内で捉え直す契機となり、装束の統一や曳き手の出自が担保されることで、かえって祭事の真正性が高まる結果となった。本来内的な行事である神事に、任意団体がハブとなり氏子町内外の住民が祭事に参加することで、土浦祇園祭を通じたコミュニティが拡大している。この外部人材の導入によって内的な神事の運営維持を図る点に「都市祭礼」としての土浦祇園祭の特徴を見出すことができる。

V-2 都市における祭礼の役割と意義

新旧住民が混住する都市において、祭事の持続的な運営の観点からは地域の都市性は障壁となってきた。一方、土浦祇園祭ではその障壁に対し地域内の就学児の参加促進や外部人材の導入による克服を図った。その結果、町内住民のつながりや

関係が見直され、氏子町内の紐帯の維持につながっている。都市においては住民の流動性や匿名性からしばしば町内会機能が不全に陥るが、土浦祇園祭は旧住民と新住民の交流機会を生み出し、町内会への参画を促す機能をも発揮している。こうした効果は、伝統的な運営形態を維持している町よりも祭りの中心を青年から子どもへとシフトした町でみられ、V-1で述べたように子どもや母親を通じたつながりが新住民世帯と町内会のつながりの発端となることが多い。また新住民の中に町内会の活動や意義を理解する者が現れると、その住民を中心に新住民による町内会への理解が進み、旧住民と新住民の良好な関係構築につながることが期待される。

また、祭礼の存在が地域内外の様々なコミュニティの形成に寄与していることが指摘できる。前章まで明らかにしてきたように、神事や神賑行事の運営にあたっては様々な団体や組織の活動が欠かせない。こうした団体は氏子町内の住民のみならず、氏子町以外の市民や市外の住民が参加するコミュニティであり、都市住民の交流機会となっている。土浦祇園祭は、こうしたコミュニティの存在によって内向的な祭礼ではなく、開放的な祭礼となっている。

都市祭礼は地域が抱える都市性と折り合いをつけながら存続することで、都市ならではの地域課題に立ち向かう手立てとなっている。

VI おわりに

本稿では、茨城県土浦市の土浦祇園祭を事例に、祭礼を運営する地域住民とそれらを取り巻く任意団体に着目し、社会構造の変化に対する住民の都市祭礼への対応を検討した。

高度経済成長期以降、多くの地方都市は激しい人口変動や中心機能の低下により衰退傾向にあり、地域の文化的基盤である都市祭礼の維持・継承が困難となった。また、新住民などのいわゆるヨソモノが町に流入することで、祭礼の変化が引き起こされてきた。本稿で扱ってきた土浦祇園祭

も、こうした状況を経験しながら変容してきた都市祭礼の一つとして位置づけることができる。

江戸時代から催行されてきた土浦祇園祭は、その担い手である氏子町の状況によって形態を変化させてきた。特に、近年は土浦市の都市機能の低下や人口減少、また氏子町の若年層の減少と、それにもなう高齢化率の上昇が著しく、担い手不足や祭礼にかかる金銭的費用の工面など、人的、物的側面での問題が深刻化した。

そのような状況において、問題解決のための対応策として、出し物を山車から獅子屋台へと転換という、物的側面での対応による場合と、住民あるいはその関係者だけでの担い手確保から、新たに外部の団体を曳き手として導入することで、山車や獅子屋台の巡行を可能とする人的側面での対応がみられた。各氏子町は、その町に適応する方法で対応しており、そこには町の歴史や住民の属性に基づくそれぞれの町ごと

の特徴が浮きでている。

また、氏子町ごとに曳き手として関わる外部団体の固定化や新たな任意団体の結成は、それまでの地域的な繋がりから、祭礼を通した新たな繋がりとして重要な意味をもつ。近年の都市祭礼は、地縁から選択的な縁⁹⁾、あるいは祭縁¹⁰⁾として新たなコミュニティを形成する役割を有しているといえる。それは、人口流動が激しい都市において、住民同士の新たな紐帯を作る上で重要な要素となる可能性が考えられる。

そのような点において、都市祭礼は、地域の文化や歴史を継承していく役割のみでなく、氏子町やその周辺地域の住民らのコミュニティを形成する機能を有している。この機能は、おそらく古くからあったと考えられるが、都市化の進展と衰退によりその維持が困難となった近年、より顕著にそして重要なものとなっている。

本稿を作成するにあたり、土浦八坂神社の鈴木健一宮司、十九会の小坂博氏、礎会の青木規幸氏、土浦祭囃子会の新井幸男氏、新川囃新城組の小野義男氏、里神楽翁会の宮本保男氏、土浦市立博物館の関口満氏、19氏子町の各地区長の方々をはじめとする多くの方々にご協力をいただきました。以上、末筆になりますが記して感謝申し上げます。

[注]

- 1) 行政区域としての川口町は一丁目と二丁目に区分されているが、氏子町の分類上はこれを合わせて川口町とする。
- 2) 長方形の木の枠に紙を張って、長い柄をつけた灯籠。
- 3) 23の氏子町のうち、蓮河原新町、港町1・2丁目、港町3丁目、湖北1・2丁目の4町は、奉賛会に所属し神事に携わるが、神賑行事には参加していない。
- 4) 多くの町内会は地区長が兼任するものの、宗教上の理由などにより、他の役員が選出される場合もある。
- 5) 芳名帳は、特別寄付の際に、寄付者の氏名と金額を書き記すものである。
- 6) 当番町以外の年に、山車や獅子を巡行することを助当番という。助当番は当番町の前後の年に参加が可能である。つまり、制度的には当番町が一周する4年のうち3年は巡行できることとなる。各町に曳き手が多く、経済的にも余裕があった時代は、助当番として参加する町もあったが、現在はほとんどみられない。ただし、2011年の東日本大震災による祭礼の縮小を受け、その翌年は2つの町が助当番として参加した。
- 7) 川口町と東崎町以外の各町から1人選出される。役員の任期は1年であるが、同一役員による長期継続も可としている。川口町から役員が選出された事例はない。川口町には水神宮（川口2丁目12）が鎮座し、これを崇拝する住民が多いために八坂神社の神事には参加しない方針を決めている。東崎町は2012年まで参加があったものの、町内人口の高齢化のために2013年以降は参加がみられない。

- 8) 天狗の面を着用する参加者については、手当込みで6,000円が支給される。
- 9) 地縁や血縁などの先天的な縁や繋がりに対し、上野（1984）では、後天的に自発的な動機により形成する繋がりを選択縁とした。
- 10) 樋口（2014）では、選択的な縁の一つとして祭りを通じて結ばれる関係と定義している。それは、選択できない地縁や血縁と重複する場合もあるが、祭りに焦点づけられて自発的に組まれる縁である。

[文 献]

- 有末 賢（2000）：現代の都市空間におけるメディアと祝祭。日本生活学会編『生活学24 祝祭の一〇〇年』ドメス出版，261-282。
- 上野千鶴子（1984）：祭りと共同体。井上俊編『地域文化の社会学』世界思想社。
- 遠城明雄（1992）：都市空間における「共同性」とその変容－1910～1930年代の福岡市博多部－。人文地理，**44**(3)，21-45。
- 金 賢貞（2006）：都市祭礼におけるヨソモノの存在とその意義－茨城県石岡市常陸總社宮例大祭を事例に－。日本民俗学，**246**，1-30。
- 佐藤弘隆（2016）：京都祇園祭の山鉾行事における運営基盤の再構築－現代都市における祭礼の継承－。人文地理，**68**，273-296。
- 土浦市立博物館（1993）：『にぎわいの時間－城下町の祭礼とその系譜－』土浦市立博物館。
- 土浦市史編さん委員会（1975）：『土浦市史』。土浦市役所。
- 豊田和平（2001）：江戸の天下祭り。比較都市史研究，**20**(2)，11-23。
- 新田浩延（2000）：常陸総社宮例大祭の空間構造－住民の参加形態を指標に－。茨城地理，**1**，3-16。
- 樋口博美（2014）：伝統的都市の祭礼にみる共同性の維持と創造－山鉾祭礼の“祭縁”を事例として－。社会関係資本研究論集，**5**，129-149。
- 前川智子（2008）：町内と祭礼－茨城県土浦旧市街地八坂神社祇園祭を中心に－。史境，**57**，79-97。
- 宮本卯之助・岩間靖典編（2011）：『神輿大全：基礎知識から，歴史・製作・保管・修繕までを網羅した決定版』誠文堂新光社。
- 柳田國男（1942）：『日本の祭』弘文堂書房。
- 渡辺康代（1999）：近世城下町における祭礼形態の変容－下野国那須郡烏山を事例として－。地理学評論，**72A**，423-443。